

父は享年七十六歳、安らかな最後だった。それほど何でも話し合えるような仲ではなかったが、私にとって父は大きな手のひらだった。就職してから忙しさに身を任せ、疎遠になつていた私を、父はどんな思いで見守つていたのだろうか……。その大きな手のひらは厳しくもあつたが、慈しみのある温かな手のひらだったことを、あの頃の私は知るよしもなかった。

世間では、三男は甘やかされて育つという話を耳にする。しかし、我が家は長男、次男と同様に三男も分け隔てなく躰けられ、平等に育てられてきた。むしろ、幼い私にとって甘やかされたというよりも不公平だと感じていたことの方が多かったかもしれない。

兄たちと比べられることは端的な例で、算数の得意な兄と違つて国語の得意な私が、算数ができないと責められることはあつても、兄より国語ができると褒められることはなかった。着ていた服も兄たちのお下がりばかりで、新しい服をねだつても父がそれを聞いてくれたことはなかった。鉄のような父の頑固さにやきもきしながら、父が仕事場でもいわゆる堅物でおつていたことは、幼い頃の私でも容易に予想がついた。

やがて私が大学生になる頃、父は定年退職を迎えていたが、退職後も公務員としてしばらく働いていた。退職金もあるだろうし、俳句をたしなむくらいで特にお金のかかる趣味もない父に、老後の資金が必要だったかどうかはわからないが、私にはあまり関心のないことだったので特に気にも留めなかった。

父の供養もおおよそ終わり、母と私たち子供は父の遺物を整理していた。テープで補修をした俳句や将棋の教本、使い古したベルト、シャツだつて襟がすり切れそうで、何もかもが年季の入っているものばかりだった。そういえば兄の古着に駄々をこね、こっそり捨て

たことがあつたが、結局父に見つかり雷のように怒られたことがあつた。

贅沢は敵だと言つたことはなかったが、父は質素節約の塊だった。自分自身のためにお金を使うことはほとんど見たことがなかったのはそのせいもあるのだろう。経済的に裕福ということではなかったが、両親はお金に困つていないような顔を見せたことはなかった。

実際、私たち兄弟の教育費も滞りなく納めていたし、私が大学を卒業する頃には兄たちは自立していた。また、社会人となつた兄たちは気持ちばかりのお金を両親に渡していた。そんな家計の中、父はなぜ定年退職後も働いていたのだろう。

『父と同じく退職した（同僚たちと一緒に隠居生活を送ればよかつただろうに。』

今更ながらに私は一人呟いた。それを聞いていた母は、一呼吸おいてから何かを思い出したように立ち上がり、奥の部屋へ行つてしまった。そして、戻るなり一冊の父の句集を私に手渡した。私は母に言われるままにペーヂを開き、それまで一度も読んだことのない父の句を初めて読んだ。決して秀作とは言えない句。しかし、その中には私の知らない父の想いが込められていた。

「お父さんはねえ、定年退職が近づいたときに、『長男と次男が就職するときに父親の職業を公務員と言えたのに、三男が就職するときに『父は無職』じゃ不憫だな』つてね。両親の職業が採用に影響する時代じゃないのね。」

物静かに語りながら見せる母の笑みが、あの日の笑顔に重なつて見えた。大学四年になつたばかりの春のある朝、私一人が、不慣れな紺のスーツを身にまとい、忙しい朝支度をしていた。見守るような笑みを浮かべる母、その隣には新聞を読む父がいた。『就職活動の調子はどうなんだ？』と、気のない質問をする父に、『うん、まあね』と答えていた私。あれからいつたい何年経つたのだろう。あの

頃私が父から受け取っていたものは、履歴書に書くための肩書きではなく、無骨な父の、余りある愛情だったのだ。私は、あふれる涙が父の句をにじませていくのを止められなかった。